2015 年 12 月 9 日

龍谷大学大学院社会学研究科長
清水隆則　殿

審査委員会

委員長：　社会学専攻教授　亀山佳明

委員：　社会学専攻教授　原田　達

委員：　社会学専攻教授　工藤保則

博士課程によらない者の博士学位授与申請審査委員会による審査結果報告

１．審査対象および審査経過と結果

学位申請論文提出者

小丸　超（龍谷大学大学院社会学研究科科目等履修生）

学位申請論文タイトル

主題：体験の社会学

副題：近代スポーツの病理を超えて

審査経過と結果

本年度の本研究科科目等履修生である小丸　超氏（2011 年 3 月本研究科社会学専攻単位取得の上満期退学）より、2015 年 9 月 25 日付で、上記の学位授与申請論文の提出があった。「龍谷大学大学院社会学研究科における博士課程によらない者の博士学位の授与に関する内規」の定めるところに従い、2015 年 11 月 4 日に、学力の確認および博士論文審査のための最終試験（公開）を行った。最終試験終了後、本審査委員会を開催し、学識などにかかる書類審査に続いて、受理審査委員会より指摘された論文の改善点に関して適切な改善がなされているかどうか、また博士課程によらない博士学位授与申請論文に要求される水準に達しているかどうか、などの課題について評価を行った。その結果、本審査委員会は、小丸　超氏への学位授与を可とするとの合意に達した。

２．学位請求までの経緯および学力の確認

小丸　超氏は、2003 年 4 月に龍谷大学大学院社会学研究科社会学専攻修士課程に入学、2005 年 3 月に同修了。同年 4 月同博士後期課程に入学、2011 年 3 月に単位取得満期退学。この間、英語文献研究と独語文献研究の単位を取得。指導教員である亀山の担当する博士後期課程・特殊演習 12 単位を修得し、「龍谷大学大学院社会学研究科研究指導要綱（内規）」に定める学力を修得した。その後、2011 年 4 月より 3 年間同研究科研究生、2014 年 4 月から現在に至るまで同科目等履修生となっている。博士後期課程には、亀山を主指導、原田達、工藤保則を副指導とし、それ以降の研究生、科目等履修生の間には、亀山を主指導として 2015 年 6 月に学位請求予定論文（草稿）を提出。7 月 15 日に受理審査に合格し、審査委員会より要求された修正を行い、9 月 25 日に本論文の提出に至った。

2005 年には、修士論文「社会学的人間学とは何か―作田社会学研究：『価値の社会学』から『ジャン-ジャック・ルソー―市民と個人』へ」を完成させる。2015 年までに論文 7 本を『龍谷大学社会学部紀要』などに発表、そのうち 2010 年には論文「スポーツ選手の引退に関する一考察―日本野球独立リーガーの場合」が学術誌『ソシオロジ』（査読あり）に掲載された。そのほかに実習報告書 3 点、書評 1 点がある。学会報告については、2005 年関西社会学会での発表以来、日本社会学会、西日本スポーツ社会学会などにおいて 10 回にわたる発表を行っている。さらに、2010 年より現在にいたるまでに、龍谷大学社会学部、京都女子大、龍谷大学短期大学部、梅花女子大などで、「スポーツ社会学」「社会学」などの非常勤講師を務めてきている。

以上の点から、小丸　超氏は、学位申請のために必要とされる学力を満たしていると判断することができる。

３．論文の審査

構成と概要

構成は以下の通りである。

序論　研究の目的

第 1 章　問題・方法・構成

第 2 章　アスリートバーンアウトの概念

第 3 章　アスリートにおける「キャリアトランジション問題」

第 4 章　方法としての「潜入」

第 5 章　「コツをつかむ」とはどういうことか

結論

概要は以下の通りである。

序論では、研究の目的について述べられる。その目的とは、社会学という学問領域に「体験」の次元（偶然的なもの、特異なもの）を導入すること、である。社会学はそのディシプリンにおいて「体験」の次元を捨象しており、この次元を導入する社会学的意義は大き

いと考えられる。そこで、まず、社会学の方法論的制約（「体験」の捨象）について論じられ、「体験」が重視される領域（スポーツや身体）に注目すべきであると主張される。また、スポーツ社会学と身体の社会学の研究動向が把握され、どちらの領域でも「体験」をいかにして捉えるかが重要なテーマとなってきている、と指摘される。

第1章では、まず、「近代社会とスポーツ」および「スポーツと身体観」という2種類の関係について述べられる。すなわち、近代スポーツは近代社会の価値（普遍主義と業績主義）を体現しているため、構造上、アスリートをアノミー状態に追い込んでゆかざるを得ない。またスポーツを支える近代的身体観は、「身体の同一性」を仮定するため、身体から「特異性」や「偶然性」といったモメントを排除する傾向があり、そのためにアノミー状態を助長する。こうした指摘に続いて、本論文を導く視座が示される。まず、ベルクソン＝作田啓一に従って「体験」（分節以前の経験）と「経験」（分節以後の経験）が峻別され、ディルタイ＝ボルノウに従って「体験」のモメントとして「特異性」と「偶然性」が抽出される。そして、社会化（「価値」に導かれる行動）と超社会化（「体験」に導かれる行動）という類型概念が示され、この両者の区別が全体を貫く視座とされる。

第2章と第3章ではスポーツにおける病理現象が取り上げられ、「体験」という視点の有効性が示される。第2章ではアスリートの「燃え尽き症候群（バーンアウト）」が取り上げられる。そこでは、まず、先行研究（心理学と社会学）における還元主義が批判される。すなわち、それらはバーンアウトについてそれを構成する諸要素へと還元して把握しようとするため、バーンアウトの本質へと接近できない。そこで、「体験」の視点が導入され、先行研究の知見を統合する形で、バーンアウトの本質が「エネルギーの空回りの状態」（社会化の過剰）として把握される。また、この過程において、バーンアウトを惹起する主因として「体験」の更新の欠如というモメントが浮かび上がってくる。

第3章では、同じく病理現象として、アスリートの「キャリアトランジション問題（引退に際しての心身の不調、社会的不適応）」が取り上げられる。ここでも、まず、前章と同様に、先行研究（心理学と社会学）における還元主義が批判される。そこで、超社会化という視点が導入され、「キャリアトランジション問題」は単なる社会的不適応（再・社会化の失敗）ではなく、いわゆる「ケリ」（脱・超社会化を導く「体験」）の問題である、と（再）解釈される。アスリートたちはスポーツ中における非日常的な「体験」（超社会化）の強烈な印象にとらわれており、その「体験」に「ケリ」（脱・超社会化）をつけなければ、次のステップに行くことができないのである。この論点が、日本独立野球リーガーの事例を通して検証され、その結果、「キャリアトランジション問題」を惹起する主因として「ケリ体験」の欠如（あるいは不十分さ）というモメントが浮かび上がってくる。

第2章と第3章を通して明らかになることは大きく二つある。一つは、「体験」（超社会化）の視点を導入することで現象の本質が把握できるようになるということであり、もう一つは、スポーツにおける病理現象は――超社会化を導く「体験」であれ、脱・超社会化を導く「体験」であれ――「体験」の欠如によって発生しやすくなるということである。したがって、コーチングにおいては、「体験」の次元をいかにしてそのプロセスに取り入れ

るか（超社会化のコーチング）、が重要となる。

第４章と第５章では、超社会化のコーチングの考察を通して、「体験の社会学」が実際に展開される。第４章では、まずガルウェイ理論の検討を通して、社会化のコーチング（「強制」に基づく）と超社会化のコーチング（「育成」に基づく）が区別される。次に、（後者に属する）結城匡啓の「潜り込み」という方法――コーチが選手の身体感覚を内側から把握する――が取り上げられるが、彼の議論は記述的である、と批判される。そこで、ポランニーの暗黙知理論とベルクソンの直観論を通して「潜り込み」が再解釈され、一般理論の中に位置づけられる。なお、この過程で、「潜り込み」は「主体／客体」図式を通して把握するのではなく、「生成する世界／定着の世界」図式を通して把握すべきである（「主体・客体両者間の相互浸透の程度を深める」）、と主張される。

第４章では「身体の特異性」（身体感覚）が強調されるが、第５章では「身体の偶然性」（飛躍・創造性）が強調される。何事であれ、物事を体得する場合、「カン」に導かれ、本質である「コツ」をつかむことが重要である。まず、「コツ」と「カン」の語義を検討するとともに、黒田亮の立体心理学が紹介される。しかし、彼の議論は「コツ」と「カン」を同一視しており、また記述的である。そこで、ベルクソンの「動的図式」（動くものの潜在的イメージ）の概念が導入され、「動的図式」が「カン」（生命の直観・ひらめき）を誘発するものとして理論的に位置づけられる。「カン」は偶然的であるから、指導者にできることは「動的図式」を活性化させることだけである。その一つの方法こそ「わざ言語」を巧みに使用する指導であって、具体例として弓道の阿波研造の指導法が検討される。「わざ言語」はその多様な意味によって、被指導者のうちに「コツ体験」を誘発させようとするのである。

結論では、「体験の社会学」の意義について五つに整理して示される。すなわち、①社会学主義の回避（人間を社会的存在としてだけでなく生命的存在として捉えることで、主体性の根拠を指示できる）、②経験主義の補完（現象の本質を把握できる、共通性を抽出するのではなく特異性を把握するため正確性において優れている）、③新しい理論設定の提示（「主体／客体」図式ではなく「存在／存在者」図式を採用することで「深さ」の次元が射程に入る）、④スポーツ界への貢献（「体験」を誘発するコーチング方法の開発など）、⑤研究領域の拡大（スポーツの種類や競技水準の差異を考慮すること、スポーツ以外の領域への適用など）、である。また、これらの意義とともに、今後の課題について触れられる。すなわち、①拡大された研究領域についての考察、②方法論の整備（実証科学の手続きとは異なる手続きの考察、たとえば「追体験」という方法など）、③「引導を渡すコーチング」（脱・超社会化のコーチング、たとえば挫折のさせ方など）についての考察、である。

４．論文の評価

本論文は全５章から成り立っている。序論で論文の目的が述べられ、それを展開する方法論が第１章で示される。以下の構成は前半部の２章（第２章・第３章）でスポーツの病理が、また後半部の２章（第４章・第５章）でコーチングがそれぞれ取り上げられている。

これらを踏まえたうえで結論が提起される。この構成は論理的に筋が通っており、論旨が明快に展開される運びになっている。

まず、序論で論文の目的が示される。その目的とは、社会学という領域に「体験」という次元を導入することである。なぜなら、従来の社会学は「経験」を重視して「体験」をネグレクトしてきたからである。ここで「体験」と「経験」の違いという重要な概念規定がなされるが、氏は「体験」を「分節されない経験」と、また「経験」を「分節された経験」として区別する。この定義がなされることにより、氏のなそうとする企てが明確になる。というのも、「体験」に基づく社会学を「生成の社会学」とし、「経験」に基づく社会学を「定着の社会学」とすることが可能となるからである。

この目的を達するために導入される重要な概念が「社会化」と「超社会化」ということになる。「社会化」は成員を価値に導く概念であり「定着の社会学」を成立させる。それに対して「超社会化」は主客一体化をもたらす概念であり「生成の社会学」を成立させる。「経験」と「社会化=定着の社会学」を、また、「体験」と「超社会化=生成の社会学」を組み合わせるところに、氏の論述の要がある。そして、これらの議論を具体的に論じるためにスポーツという領域が対象とされる。ここには氏の戦略が見られる。というのは、スポーツは身体を介してなされる行為であるが、身体という問題系は従来の社会学においては重要視されないできた学問領域であった。氏は、身体に人びとの目を向けさせるとともに、スポーツに新しい視点からアプローチすることによって自らの方法の有効性を際立たせようとするからである。

前半部の 2 章では、近代スポーツが抱えてこざるを得なかった二つの問題が取り上げられる。一つは、「燃え尽き症候群（バーンアウト）」と呼ばれる現象であり、近年アスリートを悩ましてきた病理現象と言えよう。もう一つは、「トランジション問題」という現象であり、これまた近代スポーツが包含してきた問題である。氏は、これら両者がともに近代スポーツに必然的に付随する問題として設定したうえで、経験科学である社会学、心理学がこれらの問題について明らかにしてきたことを整理する。両学問はともに経験科学であるという制約から、問題を構成する諸要因を羅列することに終始しており、問題の本質を明らかにしえていないと指摘する。そこで、「体験」＝「超社会化」の方法を導入することによってその本質を解明しようとする。すなわち、前者については当事者の側に「エネルギーの空回り」が生じていること、それゆえに、このエネルギーを燃焼させることができれば、その症状を治療できるはずであるというのである。

また、同様なことが後者についてもいえる。スポーツに打ち込んだ者にとって引退が困難となるのは、主客一体となる強烈な体験（超社会化）が本人にとって忘れがたいためである。それゆえに、その体験に「ケリ」（脱・超社会化）をつけることができるなら、彼らは先に進むことが可能になる、というのである。氏はこのことを実証するために、スポーツ現場で選手たちに実際にインタビューを試み、自らの方法の有効性を確認しようと試みている。この意味からして、3 章は説得性に富むものとなっている。

後半部の 2 章では、スポーツにおけるコーチングの問題が取り上げられる。これは前半

部のスポーツ病理への対応と呼応している。つまり、従来のコーチングは当事者の外部から指導者が観察する客観的データに基づいた指導であった。これは経験科学から導き出された「社会化」のコーチング法である。これに対して、氏は指導者が当事者の身体の中に潜入して、両者の共鳴を介して指導する方法のあり方を示す。つまり、「体験」と対応する「超社会化」のコーチングの可能性を示唆する。第 4 章において、結城匡啓のコーチング法を検討し、それが「超社会化」のコーチングに類似していることを指摘する。同様にして、第 5 章においても、氏は黒田亮の「コツ」と「カン」の心理学を検討し、それが「超社会化」の方法と類似している、という。しかしながら、これらはともに記述的表現に終始しているために、理論的な明確さに欠けるとして、それを補うために、前者ではポランニーの「暗黙知論」とベルクソンの「持続論」が、また後者においてもベルクソンの「動的図式論」が導入される。確かに、氏の言うように、結城匡啓のコーチング論も、また黒田亮のいう「コツ・カン」論も、今までの議論からすれば独創的な方法であり、その根拠を「超社会化」論という観点から明らかにして見せたことは充分に評価に値するところであろう。しかしながら、彼らの議論の欠陥を補うために、ポラン二ーあるいはベルクソンの議論を導入することにはわずかな困難さを覚えずにはいられない。というのは、両者の間には抽象度の次元において格差がありすぎると評者は思わずにはいられないからである。両者を媒介する次元を挿入するという工夫がなされてもよかったのではないかと判断されるのである。この点が少し惜しまれるところである。

結論部の評価に入ろう。ここでは述べられたことが 5 点にわたって整理されているだけでなく、本論文の有する欠落点が指摘されている。さらには、この論文を発展させてゆく方向性についても的確に整理されている。この反省と整理には高い評価を与えることができる。自らの論文の限界と展望を自覚していると受け取られるからである。

以上を踏まえて全体的評価を行おう。氏の目的は「体験」の次元を社会学の領域に導入することによって、身体論研究とスポーツ研究に、さらにはこれを介して社会学それ自体に、新しい知見をもたらすことであった。これを実現するために、まず方法論を明らかにし、それを具体的な領域—ここではスポーツの病理現象とコーチングの問題—に適用させ、方法の有効性を証明したのである。こうした一連の作業を通して、当初の目的を論証して見せたのであるが、氏のオリジナルな発想が生かされた充分に説得力のある論文に仕上がっているとみなすことができる。このように見るなら、本論文は博士学位申請論文として評価に値する論文であるといえる。

5．審査のまとめと結論

小丸　超氏は、学歴、研究業績、教育歴および博士学位申請論文に照らしてみるなら、論文博士学位にふさわしい学識があり、また自立して研究を行う能力があるだけでなく、研究の蓄積と能力に基づいて「社会学」「文化社会学」「スポーツ社会学」などの諸科目を大学において教授できる資格を有していると判断される。よって、本審査委員会は小丸　超氏への学位授与を全員一致で可とするものである。